

革靴

宗像市 高木 サツ子

ある日曜日の朝、娘が何やらごそごそしている。いつも部屋の中はぬぎっぱなしの服が山となり、読みかけの本が散らばり、足の踏み場もないのに今日はまたどうしたことか部屋の整理をしているらしい。しばらくして大きな黒いビニール袋を3つも抱え出して「お母さん、これを廃品回収に出しといて」という。見ると服や靴がギュウギュウ詰めに入っている。私は一つ一つ取り出してみた。2、3回しか手を通していない服、はいた形跡すらないような靴が何足も出てきます。何とこれを捨てるというのです。私達戦中派から見ると全く考えられないことです。

服もさることながら、靴はサイズさえ合えば自分ではきたいぐらいだが、24サイズに22.5サイズの足ではかなわない。捨ててくれといわれても踏ん切りつかず、しばらく物置に眠らせることにしました。

昭和20年。私は北九州の門司港に住んでいました。女学校3年生の頃、戦局は厳しさを加え、B29の本土空襲は頻繁になりました。空襲警報のサイレンが鳴るのはいつも夜中か明け方が多かった。その日も夜明け間近、まだ薄暗い空に空襲警報発令のサイレンが不気味に鳴りひびく。間もなく、かなりの低空でB29の来襲である。すごい爆音。あわてて防空頭巾を被り避難の準備のさなか『あっ！私の革靴』と、とっさに思った。大事な大事な私の黒の革靴。もしかして空襲で焼けたら大変、はいて行こうと。

その靴には私なりに大きな思い入れがあった。当時は革の靴などとても手に入らなかった時代で、父が特別のついでで私にと買ってきてくれたものでした。日頃口数の少ない父が唯一、品物で示してくれた私への愛情でした。私はそれはそれはうれしくて、いつも取り出して箱に入ったピカピカの靴をじっと見るだけで満足して、決してはきはしませんでした。私の宝物でした。焼夷弾がそこそこに落ち、生きた心地がしませんでした。弟の手を引っ張って走り、近くの防空壕に飛び込みました。壕の入り口付近では、大人の人達が火の粉を懸命に消していました。

そのうち壕の中にも水が入り込んで、『私の革靴』も水に浸かってしまいました。やがて火も消えて一段落し、ホッとして靴を見たとき、あっ！と驚いた。『私の革靴』は革がほとびて膨張してしまい、見るかげもない。

涙が目いっぱいになり、靴はますますふやけて見えた。あんなに大事にしていた靴が…。目いっぱいになった涙は、大きな粒になって靴の上にポトポトと落ちました。

そのころ学校での『体操の時間』、T先生が私のはいているズックぐつをみて感心したように「おまえさんのズックは13文だな。まるで戦闘艦だな」と大勢の生徒の前でいわれた。

皆はどっと大きな声で笑った。多感な年ごろの女の子にとって最大の屈辱でした。私は顔を

真っ赤にしてうつむいていたのを覚えています。その場を逃げ出して走って家へ帰りたかったのです。

その当時ズックくつは配給制で1ヶ月に1クラス3足ぐらいの割り当てしかありませんでした。くじ引きのためなかなか当らず、見かねた父が自分の10文のズックをくれたので喜んではいて行ったのに…。

その時の恥ずかしさと靴への執着があので空襲の時に、ぜひはいて避難したかった豚革のくつにつながったと思います。

そして50年が経過した今日、今度は『父の靴』ならぬ『娘の靴』をはいてみようかという気になって、ふと戦時中のことを思い出しました。今はお金さえ出せば何でも買える時代、でも私はあの学生時代の純心な気持ちがいとおしく、なつかしく今も脳裏を横ぎるのです。